

た、タヌーヒーが参加していた座談の場が宰相のもとに仕えている人々が集う場所であったことから、当時の行政の実態を伝える逸話が極めて多く、行政文書アーカイブが伝存しないアッバース朝の行政についても一級の史料となっている。

本書に関して一点だけ惜しまれるのは、索引が備えられていないことである。本書には、おそらく翻訳の底本とした校訂版に付された注釈をベースとしつつ、それを大幅に補った訳註がつけられている。アッバース朝からブワイフ朝期にかけての様々な人物が登場し、訳註として彼らについての簡にして要をえた情報がまとめられているほか、事項についても、税務に関する細かい用語から生活の中で用いられた物品に至るまで、当時の社会を理解するために必要な言葉が網羅されている。本書は、もし索引が付されていれば、アッバース朝社会の研究を志す学生にとって、非常に強力な「工具書」ともなったと思われる。

もちろん、本訳書の価値は、それでいささかも揺るぐことはない。アッバース朝期の逸話を大量に収録した本書が出版されたことによって、中世イスラーム社会で人々がどのように生きていたのかを、日本の読者も容易に知ることができるようになった。気が早い話ではあるが、版元である岩波書店によって本書が文庫化され、より多くの人々が手に取り、座談を聞くように気軽にタヌーヒーの語りを堪能することができるようになることを願ってやまない。

<参考文献>

- イブン＝ハルドゥーン 1979-1987『歴史序説』（森本公誠訳・解説）全三巻、岩波書店（文庫版として『歴史序説』全四巻、岩波文庫・青（33）-481、2001 がある）。
- 岡崎桂二 2009 「『マカーマート』における医療のトポス——蘇生術、産婆術、預言者の医術」『四天王寺大学紀要』47, pp. 217-244.
- 橋爪烈 2018 「森本公誠（翻訳）タヌーヒー『イスラーム帝国夜話』上下巻」『イスラーム世界』90, pp. 29-37.
- 森本公誠 1975 『初期イスラーム時代エジプト税制史の研究』岩波書店。
- Ashtiany, J. 1991. “al-Tanūkhī’s *al-Faraj ba’d al-Shidda* as a Literary Source,” in Alan Jones(ed.), *Arabicus Felix Luminosus Britannicus: Essays in Honour of A. F. L. Beeston on his Eightieth Birthday*, Reading: Ithaca Press, pp. 108-122.
- Hamori, A. 1998. “Tinkering with the Text: Two Variously Related Stories in the *Faraj Ba’d al-Shidda*,” in S. Leder (ed.), *Story-telling in the Framework of Non-fictional Arabic Literature*, Wiesbaden: Harrassowitz, pp. 61-78.
- Morimoto, K. 1981. *The Fiscal Administration of Egypt in the Early Islamic Period*. Dohosha.
- Tillier, M. 2007. “L’exemplarité chez al-Tanūhī : les cadis dans le Nišwār al-muḥāḍara,” *Arabica* 54, pp. 1-24.

（亀谷 学 弘前大学人文社会科学部講師）

末近浩太 『イスラーム主義——もう一つの近代を構想する』（岩波新書）岩波書店 2018 年 530 頁

「あるべき秩序の回復」を目指す政治潮流は、近年世界的に強い存在感をもつようになっている。それはアメリカのトランプ政権に象徴的に示されたように、遠い異国の話ではなく、「われわれ」の社会においても生起し、時に「排外主義」や特定の「人種至上主義」といった自己／他者の境界の再設定と結びつきながら展開している。「あるべき秩序」とは何なのか、それを「回復」させるためにどのような手段をとるのか。あるいは、何が「あるべき秩序の回復」へと進ませ、進むことが何をもたらすのか。こうした問題について検討せざるを得ない状況が日常に広がっている。

この一世紀を見渡せば、この「あるべき秩序の回復」という政治潮流がもっとも顕在的に、持続的に展開してきたのがイスラーム主義に他ならないだろう。そのイスラーム主義について、最新の研究動向を踏まえながら一般読者にもわかりやすく解説しているのが本書である。

著者はイスラーム主義を「『宗教としてのイスラームへの信仰を思想的基盤とし、公的領域におけるイスラームの価値の実現を求める政治的なイデオロギー』……(中略)……平たく言えば、イスラームに依拠した社会変革や国家建設を目指すイデオロギー」(p.2)であると定義した上で、それを単なる信仰と区別する。イスラーム主義はイスラームをイデオロギーとして選択することであり、「イスラームをイデオロギーとして選択するかどうかについては、どちらかと言えば信仰よりも理性の問題である」という(p.9)。そしてオスマン帝国後の「あるべき秩序」の模索が続く現代中東(p.32)において、どのようにイスラーム主義が展開してきたのかを概観していくのだ。本書で扱う18世紀後半から21世紀までのイスラーム主義の展開には、「アラブの春」やISISの台頭も含まれており、近年の状況をフォローアップしたい一般の読者の関心や期待を裏切らない内容となっている。

しかし読者のなかには、イスラーム主義が中東に限った話題ではないのではないか、という疑問を抱く者もいるかもしれない。ナイジェリアのボコ・ハラムによる事件やバングラディッシュのダッカ・レストラン襲撃人質テロ事件が記憶に新しい読者も少なくないだろう。当然ながら、中東以外の地域についても目を向ける必要はある。しかし本書が中東以外の地域について多く触れないことは、決して本書の欠点ではない。著者の主な関心はイスラーム主義が強く作用してきた現代中東政治を理解するという点にある。またイスラーム主義の中東での展開が他の地域に及ぼす影響が非常に大きいことを考えれば、中東地域に焦点を絞ることで核となる議論に読者を集中させることができるからだ。ポスト・イスラーム主義と呼ばれる一連の議論を整理した終章は、まさに中東地域に議論を絞っているからこそイスラーム主義が今後どのような方向へと進んでいくかという評者を含む読者の関心に答え得るのである。

アーセフ・バヤートやオリヴィエ・ロワによって牽引されてきたポスト・イスラーム主義の議論はこれまでも日本で紹介されてきたが[cf. 私市 2012: 61–65]、著者は現代中東政治を理解するために、単純なポスト・イスラーム主義論の援用を批判的に再検討している。

著者が再検討するポスト・イスラーム主義の議論には、二つの潮流がある。一つはロワの言うような「イスラーム国家の樹立に『失敗』した後、国家権力よりも社会や個人における生の充実へ、言い換えれば、公的領域よりも私的領域の『再イスラーム化』へと活動の重心を移していくもの」(p.201)という議論である。著者によれば、1990年代から2000年代にかけての中東のイスラーム主義の変化を概ね正確に捉えているという点で、この議論は肯定的に評価できるという。一方で、ポスト・イスラーム主義への移行はイスラーム主義の「失敗」に端を発するとして、イスラーム主義の不可逆的な変化として捉えることには疑問を呈している(p.203)。

もう一つはバヤートのポスト・イスラーム主義論、つまり「ポスト・イスラーム主義とは、イスラーム主義が1970年代や80年代に見せたような強い訴求力を失った今日において、『もう一つの近代』を実現すべく、イスラームと個人の選択や自由、すなわち民主主義や近代性とを結びつけようとする』営み」(p.204)という議論であるが、こちらについても疑問を呈している。それはバヤートがポスト・イスラーム主義をイスラーム主義とは質的に異なる言説と政治の誕生と見做す一方で、現実にはイスラーム主義とポスト・イスラーム主義の両者が併存状況であると指摘する点である。著者によれば、このようなバヤートの説明では、ポスト・イスラーム主義は変化と多様性に富むイスラーム主義の今日的な形態という議論へと収斂してしまい、イスラーム主義とポスト・イスラーム主義を峻別する必要性が希薄化する。著者はむしろ、西洋近代とイスラーム的近代の二分法を止揚したモダニティの模索がポスト・イスラーム主義において顕在化したという点こそが、イスラーム主義とそれとを隔てるうえで重要な転換点であると見ているようである。

こうした西洋近代とイスラーム的近代の二分法を止揚したモダニティを模索する在り方が再びムスリムの間で顕在化していることは、評者の研究にも共通している。評者はイランを中心にムスリムの日々の実践に焦点を当て、文化・社会現象を対象にした研究を行っている。

イランでは、1979年の革命と社会のイスラーム化を経て、体制が称揚する価値の体系に沿いながらも、様々なイスラームの実践形態が生まれてきた。たとえば、非業の殉教を遂げた模範的な人間であるシーア派第三代イマーム、ホセインについて考える集会という名の若い男女の出会いの場として利用される「ホセイン・パーティー」である。こうした新たな実践はYaghmaian [2002: 61–64]らの指摘にあるように、「官製行事」を若者が都合よく流用したとして捉えられるきらいがある。しかし近年のアーシューラーなどの宗教

儀礼の「パフォーマンス化」や「娯楽化」にも通じることであるが、それら新たな実践を都合の良い流用として捉えられるのだろうか。むしろ実践者本人らにとって、身体化されたモラルを遵守しつつ自らの願望を適えてきたと捉えるべきではないだろうか。さらに言えば、近年のカフェの文化のようなグローバルな消費文化が矛盾なくイランの社会に広がりを見せている。チャードルを深く被ったムスリマが友人の男女とカフェでカフェ・ラテを飲むことに矛盾はない。もはやイラン研究・イラン社会において重要なテーマであった「伝統」と「近代」という問題は、両者の二分法の止揚へと向かっているのではないだろうか。

「イスラーム的」と考えられる側面とグローバルな消費文化が折り合いを見せながら矛盾なく展開していることは、決してイランに限ったことではなく、イスラーム復興を経た他の中東のムスリム社会にも共通しているのではないだろうか。レバノンのヒズブッラーの影響力の強い地域のカフェを舞台に描かれたディーブとハルブによる民族誌はその一例である [Deeb and Harb 2013]。本書で著者が言わんとしている西洋近代とイスラーム的近代の二分法を止揚したモダニティの模索は、イスラーム主義というレベルだけで起こってきた事態ではなく、イスラーム復興に見られる事態だと考えることができるのではないかと評者は考えている。もちろんグローバル化の進展に対するムスリムの反応は一律ではなく、時にはムスリム内の認識の変化を伴ったイスラーム的近代の模索が一層進むということは、近年のハラール産業やイスラーム金融の展開からも指摘できる [cf. 八木 2013: 39–41]。

イスラーム主義において「あるべき秩序の回復」の方向の一つが、西洋近代とイスラーム的近代の接合へと向かう中で、翻ってわれわれの進むべき道筋の一つも「伝統」と「近代」との二分法の止揚である必要が示されているのかもしれない。もちろん、その方向へと進むと決めることは、ポスト・イスラーム主義の行方が不透明な現状において、時期尚早な判断である。であるからこそ、ポスト・イスラーム主義の行方を、自身を見るように考えていかなければならないのかも知れない。

<参考文献>

- 私市正年 2012 『原理主義の終焉か——ポスト・イスラーム主義論』 (イスラームを知る 11), 山川出版。
 八木久美子 2013 「イスラーム的に消費するということ——ハラール概念の変容とその意味」『総合文化研究』16, pp. 30–43。
 Deeb, Lara and Mona Harb. 2013. *Leisurely Islam: Negotiating Geography and Morality in Shi'ite South Beirut* (Princeton Studies in Muslim Politics), Oxford University Press.
 Yaghmaian, Behzad. 2002. *Social Change in Iran: An Eyewitness Account of Dissent, Defiance, and New Movements for Rights*. New York: State University of New York Press.

(黒田 賢治 国立民族学博物館特任助教)
 人間文化研究機構センター研究員)

阿良田麻里子『食のハラール入門——今日からできるムスリム対応』講談社 2018年 144頁

日本に観光で訪れるムスリムは年々増加傾向にあり、日本国内でも、「ハラール食品」や「ムスリムフレンドリー」といった言葉を耳にすることが多くなった。また、2020年には東京オリンピック・パラリンピックを控えていることから、ムスリムの「おもてなし」への対応がこれから一層高まると予想される。実際に、企業向けハラール・セミナーの開催やハラール・スタディーツアーなどもみられるようになり、ハラールへの関心は日本でも、国際的な高まりを追うかのように高まってきている。加えて、ハラール食品に関する入門書やハラール認証制度に関連する書籍がいくつも刊行されるようになってきた。とはいえ、ハラール食品をビジネスとして扱うことに特化した書籍が多く見受けられ、ハラールに関して非常に不正確な記述のものが多く。

本書はハラールに関する入門書として、類書とは質が違っている。東南アジア、特にインドネシアを文化人類学的に研究し、現地の事情に詳しい著者はさらに、国立民族学博物館、東京工業大学「ぐるなび」食の